
幻夢抄録 目覚め 9章

維月十夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻夢抄録　目覚め　9章

【ZPDF】

Z0899A

【作者名】

維月十夜

【あらすじ】

ショックから、なんとか立ち直った氷魚。しかし、新たな悲運が、さらに彼女を追いかけていく…

忍び寄る殺氣 紫風（しりふ）

氷魚は、まだ寝ている瑪瑙を、起^ひいたなによつに部屋を出て行つた。間の空いてしまつた十日間、氷魚の分の仕事も、瑪瑙はしていたのだろう。

彼は、文句一つ言わなかつた。

「さて、と…まずは洗濯洗濯」

井戸の脇に、洗濯物を詰めた籠と盥^{たらい}を置き、氷魚は、水をくみ上げた。

空は青く澄み、冷えた、朝の大気が肌に心地よい。

こんな、当たり前のこと、人として暮らしていた頃は当然、日常生活にあるべきものだと、大して気にも留めていなかつた。

今、改めてそう実感する。

干した洗濯物が、風になびく。氷魚は、異様な色に変色してしまつた、自分の髪を押さえた。

一体、どうしたというのだろう?この変化は。

そんな時、氷魚は凍つたように、動きを止めた。

あの、いつか自分と瑪瑙の前に現れた、猫の形をした、妖魔の気配だ。

しかも、ひどく殺氣だつている。

彼女は身を翻^{ひるがえ}し、村の出口への道を走つた。

壊してはならない。

瑪瑙の村を、人々の、幸せな日常を。

恋ひ寄る殺氣 紫風（しりん）（後編）

「いつも、維月です。

やつとシコソクから立ち直った氷魚ですが…

悲惨です、また新たな試練が！？

この先、どうなるのかまだ分かりませんが、よろしくお願いします
です。

#物語（前編）

茨の海で、対峙するひおと、謎の刺客・紫風
目に傷を負つた紫風は、氷魚の前から一時、姿をくらませ、市井に
潜伏した。

自分は、狙われている！

誰かは分からぬが、自分を狙う者がいる！

走つて、どのくらい走つたのか分からなくなつた頃、氷魚は、足を止めて息を整え、顔をあげた。

そこは、鋭利な棘を持つ茨が茂る、草原だつた。
どこなのはかは、全く分からぬ。

けれど、かなり、瑪瑙の村から離れたのは確かだらう。

「ふん、あの邪魔な男も、今はいない。この間の続きとこいつか」「あんた…どうしてあたしを狙つ…？」

氷魚は一步、後じさる。

田の前に立るのは子猫だが、油断はできない。

「どうして、ね…訳も知らないで、死ぬんじゃ可哀相だから教えてやるよ。あんたが邪魔なのぞ、憎んでいる方がいる。あたしは、その命令に従つているだけぞ」

猫は、ニヤリと顔を歪ませて言った。

「あたしが、邪魔！？」

「ううう！だから、わざと終わらせてくれ！」

子猫は一瞬にして、まるで、伏せていた場所から起き上がるようにして、茶色の毛皮をした豹に変わつていた。
それは、間髪入れずに飛びかかる。

「くっ！」

氷魚は、背を向けて逃げる、生憎、まわりに武器になつそつな物は、一つも見当たらなかつた。

彼女の白い頬に、手足に、無数のかぎ裂きができる。

(なにが、なにが剣士の血よ！こんな時にこそ、役に立つてくれたつていいじゃないのつー！)

「つ痛…！」

氷魚は転んだ、足に、鋭い痛みが走る。

「もうお終いかい？手間どらせやがつて、フン…もう、逃げる力も残つてないつてのかい」

氷魚は、じつと豹をにらみ据える。

もう、後戻りはできない、やるしかないのだ。
彼の中を、急速に、走馬燈が巡っていく。

氷魚は、豹に向かつて走り出した。

「なー!?」

豹は一瞬、身を低くしたが、間に合わなかつた。

氷魚は、豹を殴り倒すと、とんほを切って、離れた場所に着地した。両者は、じつじつと聞合いを狭めながら、対峙する。

「殺される……」で、死ぬわけにはいかないんだ！」

「貴様ア……よくも顔を剥いたな！」

ケルル、と豹が牙を剥いて唸る、身を低くして構え、腕を振り上げては、両手五指同時に突き出す。

いや、氷魚の方が、数秒か豹を上回っていた。

「...」

氷魚は、豹の、鋭利な爪にはね飛ばされ、茨の上に倒れ込む。

「か、一つか絶対に覚えておいで！」

砂嵐を起しつゝ、豹は、一瞬のうちに消えた。

卷之三

「か……病……うながたが死」

彼女の手足の傷は、すでに、かぎ裂きと呼べるものではなくなつて

いた。
おひただ

彼女の歩いてきた後には、黓しい血糖が、跡となつて残してしまつた。

ついに、氷魚は座り込み、彼女の傷だらけの頬を、涙が伝った。

擦り傷だらけの頬に、涙がしみた。

「瑪瑙……」

氷魚は、滑り落ちるように、弧を描いて崩れ伏した。

その脇腹は血で濡れ、止めどなく、彼女の命が流れ出していく。

「あたしは、死ぬ、わけにはいかない……まだ、やることがある」「眩しいほどの空の青が、目に、痛かつた。

丁度、同時の、とある衙外れ……

「たすけて、助けてください……」

血まみれの、裕福そうな身なりの娘が、道ばたで泣いていた。目を押さえて、泣いているところに、声をかけた男がいた。

「どうしたね娘さん……ケガをしているのかい？」

「田を……どうか、助けてくださいまし」

「さ、早く掘まつて、でも、一体何に！？」

「狼ですわ……赤い狼に襲われて」

「赤い、狼？と、とりあえず、ここからすぐには、私の家があります。私の家に行きましょう」

「……ありがとうございます」

「いいえ……」

娘を助けた男は、衙はずれに住む医者だった。

「これはひどい……残念ですが、失明していますね」

「そうですか、ありがとうございました……」

「いいえ、命だけでも、助かつてよかったですよ……」

「まあ嬉しい、そう言つてくださるのね……なんて優しいお方

「いや、そんな……」

日が差し込み、彼女の髪を照らす。

茶色の髪は、日に透けて、金色にも見えた。

「あの、お願ひを……聞いてはいただけません?」

「ええ、もちろん……なんですか？」

男が、茶髪の娘に、好意を持つたのは明らかだった。

「あなた、とてもきれいね、私、きれいな物が好きよ」

「え…あの？」

抱きつかれ、男は慌てる。

「あの、そういうことは…」

「私も…欲しい物がありますの」

「なんですか？あなたが望むなら、何でも」

「本当？嬉しいわ」

「あ…」

唇を奪われた男の、目の焦点がはずれ、男はがくり、と膝をついた。
「神経毒よ…えぐられても、痛みは感じないの。言つてもムダよね、
聞いてないんだもの」

男は、事切れていた。

「まだ温かいうちにね、あんたの目を貰うわ。しばらくは代用で我慢するしかない、バカな男よ…わざわざ声なんかかけなきや、死ぬこともなかつたろうに。さあて、目も戻つた、あの女、今度こそ息の根を止めてやる！」

男の、部屋の窓の隙間から、茶色い毛玉が落ち、それは、小股で歩いて角を曲がる。

しかし、そこに子猫の姿はなかつた。

氷魚の意識は、急速に浮上した。

どうやら、自分は走つているようなのだが、ここが、どこなのか分からぬのだ。

ひどく、殺伐とした景色ばかりが過ぎていく。
まわりには、草はあるが、生き物の気配すら、感じられなかつた。
帰らなければ

帰らなければいけない…瑪瑙の元へ。

今の彼女が願うのは、ただ、それだけだつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0899a/>

幻夢抄録 目覚め 9章

2010年10月16日00時08分発行